

1 章 THE WILD &  
WOOLLY WILL

犬のしつけと

人間のしつけ

わが家にはかつて、私たち夫婦、長男、長女、一匹のハムスター、一羽のオウム、金魚鉢に寂しげな一匹の金魚、そして神経過敏な二匹の猫がいました。けんかや争いはほとんどなく、まあ穏やかで平和な暮らしでした。

わがままでがんこなダックスフント — シギー

いや、そう言えば、もう一匹いました。愛想がなく、わがままでがんこなダックスフントです。体重は五キロちょっとで、名前はシグモンド・フロイド、愛称はシギー。この犬は「自分こそ、この家の主だ」と思っていたようです。一般的にダックスフントは独立心があると言われますが、中でもシギーは特別でした。いえ、決して性格が悪いのではなく、言うことをきかないだけです。シギーは、死ぬまで私と主人の座を争い続けました。

がんこなばかりか、家族の一員としてのつとめを果たさない、寒い朝は新聞を持ってこない、ボールを投げてみてもあとを追わない、庭のもぐらの見張りをしない、それに普通の飼い犬がする芸をほとんどしない。とにかく、あらゆるペット訓練法に乗ってこないのです。することと言えば、水を飲み、においを嗅ぎ、動くものには片っぱしから吠えるだけ。

番犬としても失格でした。というのも、ある日の早朝三時頃、泥棒が裏庭に忍び込んだ

時のことです。ぐっすり眠っていた私は、突然深い眠りから目を覚まし、起き上がって暗闇の中を家の向こう側まで手探りで進みました。中庭にだれかがいる。シギーもそれに気づきました。なぜならこの憶病な犬は、ちゃっかり私のうしろにしゃがみ込んでいたからです！

自分の心臓の鼓動を数分間聞いたあと、裏のドアの取っ手に手を伸ばしたちょうどその時、裏庭の門の扉が素早く開き、すぐに閉まりました。それまでだれかが私から一メートルもないう所に立っていて、次にガレージに入って何か悪さをしていたのです。私は暗闇にまぎれてシギーと手短かに作戦を立て、この泥棒の正体をつきとめるのはシギーだと決めました。

ドアを開けて「行け！」と叫んだのですが、シギーは心臓発作でも起こしたのか足がすくんでしまい、裏のドアから押し出そうとしてもだめでした。この騒ぎの中で、幸い侵入者は逃げ出し、犬も飼い主もほっと胸をなで下ろしました。

そうは言っても、シギーは家族の大切な一員でした。確かにわがままでしたが、いくつかの簡単な命令はなんとか覚ええました。主人である私に従うようになるまでには、あとで語り草になるような戦いが何度ありました。その中で一番大きかったのは、私が会議で三日間マイアミへ出かけた時のことです。帰ってみると、シギーはすっかり主人気取りでした。夜には、シギーの思い込みがどれほど強かったかをまざまざと知らされました。

その晩十一時、私はシギーに、寝る時間だよと告げました。リビングに備えつけの囲いの中が、寝場所です。かれこれ六年間一日も欠かさず、夜になると私は命令し、シギーもすなおに従ってきました。しかし、あの時ばかりは、トイレの柔らかな便座カバーの上に座りこんで、ここでも動かなかったのです。わきにある電気ヒーターのおかげでほんのり暖かく、家で一番お気に入りの場所でした。

ちなみに、トイレの上に飛び乗る前にふたが閉まっているかどうか確認すべきことを、シギーは苦い経験から学んでいました。あの晩のことは、いまだに忘れません。寒い戸外から転がるように帰ったシギーは、勢いよくジャンプして暖かいトイレのふたに乗ろうとしました。しかし、ふたが上がっていたため、私が助け出してあげなければ、あやうくトイレの水で溺れるところでした。



さて、シギーとせめぎ合いをした夜のこと、トイレのふたの上に座るシギーに、寢床に行けと言ったのですが、シギーは耳をうしろにそらせ、

頭をゆっくりと私のほうに向けました。そして、わざと片足をトイレのふたに置き、肩を突き上げ、唇の両端を上げ奥歯を見せておどし、精一杯こわそうなり声を上げました。シギー語で「うるさい！」という意味です。

私に反抗するのはこれが初めてではなく、対処法はただ一つ、痛い目をみるぞと警告することでした。シギーに従順を教える唯一の道具であるベルトを取りに、物置へ急ぎました。この次第を見守っていた妻によれば、私が部屋から出たとたん、シギーはトイレのふたから飛び下りて、私がどこに行ったのかを廊下から確かめ、それから妻の背後に隠れてうなり声を上げたそうです。

私は戻ってベルトを見せ、ご機嫌斜めのシギーにもう一度寢床に入るように言いました。動こうとしないので、お尻をたたきました。するとベルトに噛みつこうとする。もう一度たたくと、今度は私に噛みつこうとする。

そのあとのことは、とてもことばにはなりません。人間と動物との間に、いまだかつてこのような激しい戦いがあったかというような修羅場しゆらばでした。シギーも私も、引っかいたり、つかんだり、うなり声を上げたり、部屋中を右へ左へ立ち回りました。思い出すだけで恥ずかしくなります。シギーを少しずつリビングへ、そして寝場所へと追い込んでいききました。シギーはソファアに飛び乗り、あどざりし、歯をむき出しにしてうなり、リビ

ングの隅に座り込んでしばらく最後の抵抗をしましたが、ついに寝場所に引き下がりました。勝因はただ、私のほうがシギーの体力を上回っていたからにすぎません。

翌日も、就寝時には似たような醜態になることを覚悟しましたが、驚いたことに、シギーは反抗せず、不平も言わず、命令通りすなおにスタスタと歩いて行ったのです。以来、二度とあのようなひどい態度を見せたことはありませんでした。

今になって考えれば、シギーは犬なりに、「ご主人が本気かどうか、見せてもらいましょう」と言っていたのです。

たかが犬のことを、あまりにも人間扱いしているように思うかもしれませんが、そんなことはありません。獣医によると、犬の中でも特にダックスフントやシェパードは、飼い主の権威に激しく挑戦してのち、初めて主人を主人と認めるのだそうです。私はあの夜に、主人はだれかを思い知らせたので、あとは最後まで仲良くできました。

本書は、犬のしつけの本ではありません。ただ、シギーの話には、育児にもあてはまる原則があるのです。ちょうど犬が主人の権威に逆らうように、子どもは、犬以上に親に逆らう傾向があります。これはどうでもよいことではありません。しつけというテーマで書を著す世間の「専門家」たちが、人間のこの性質を認めてこなかったからです。本書の初版が出た二十五年前には、意志の強い子どもたちがよくする親との意地の張り合いを分かり

やすく解説した、保護者や教師用のテキストにはめったにお目にかかりませんでした。意志の強い子どもたちが、反抗せずに大人の指導に従うことはまれです。大人の指導力を試し、従う価値があると認めて初めて従う。これは、子育て中の多くの親たちが必ずぶつかる、やつかしい事実です。

「だれが一番強いか」が気になる

しかし、ある子ら、特に意志の強い子は、どうしてそんなに反抗することが好きなのでしょう。単純に言えば（よりくわしい説明は、第二章にあります）、子どもは、強くて勇気ある人が好きだからです。親の決意の固さを試すだけのために命令に背くことがあります。なぜか？ それは「だれが一番強いか」が気になるからです。ロビン・フッド、ターザン、スパイダーマン、スーパーマンなどのヒーローが子どもの人気を呼ぶのも同じことです。「うちのパパは、おまえんちのパパをぶんなぐれるぞ」などと、子どもは自慢します（そう言われている子は、「へんだ。うちのママだって、うちのパパぐらいぶんなぐっちゃうもんね〜だ！」と言ったとか）。

引っ越したり転校したりすると、子どもは新しい所で自分の地位を確保するために、口

先か腕力で戦わなくてはなりません。子どもは強くて勇気のある人を重んじるものなので、新しいリーダーがどれほど強いかを試したいと思います。ですから、あなたが親であれば、祖父父母であれ、ボーイスカウト、カブスカウトのリーダー、または学校の教師であれ、あなたの責任のもとにある子は、遅かれ早かれあなたに挑戦します。寝る前のシギーさながら、自分なりに「本気かどうか見せてもらおうじゃないの」と言ってくるのです。その場できちんと対応しておかないと何度も同じことをされます。幼子さえ、実に巧みに挑戦して来ます。

ある父親が、三歳の娘を連れてバスケットボールの観戦に出かけました。言うまでもなくこの子は、体育館で見るものすべてに興味津々で、試合などはそっちのけ。父親は娘に、自由に歩き回っていいし、観覧席のほうに昇ってもいいが、ここからはだめという境界線を決めました。手を取って体育館の床に線がひいてあるところまで連れて行って、言い聞かせました。

「いいかいジェイニー、この建物のどこで遊んでもいいけど、この線から向こうに行っちゃだめだよ」

父親が席に戻るやいなや、その三歳児は教えられたばかりの「立ち入り禁止区域」へと

ちよこちよこ走り、境界線ギリギリで立ち止まり、それから父親を振り返り、肩ごしに歯を見せて笑ってみせ、その線の向こうにわざと片足を踏み入れたのです。あたかも「パパ、どうする？」と言っているようでした。親なら、だれでも覚えがあるでしょう。

人はみなこの子と同じで、わがままな反抗をします。この子がしたことは、エデンの園で見たアダムとエバの愚かさと同様にちがいはありません。神さまは仰せられました。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からはとって食べてはならない」（この線を越えたらいけないよ）

しかしアダムとエバは、あえて神に逆らい、全能者の権威を試したのです。自分の意志を押し通す傾向こそ、おそらく以後の人類に浸透して行った罪の本質です。なぜそれを私が強調するかと言えば、子ども時代のうちにこの「わざと反抗する」という問題に親が適切に対応しなければ、当人がのちのちつらい目にあうことになるからです。その時期に根ざす雑草が、悩み多い思春期には、いばらのはびこる広大な荒れ地を生んでしまいます。

子どもの反抗という挑戦を親が受けて立たないと、親子関係に重大なことが起きます。つまり、この人の言うことは聞くに値しないと、子が親を軽蔑のまなざしで見始めます。もつと重要なことに、本当に自分を愛しているなら、親はどうして悪いことをするままに

放っておくのかと子どもは思います。子どもというものは生まれつき矛盾に満ちていて、親に指導されたいと願いつつも、指導するにふさわしい親であれと要求しているのです。子どもとのぶつかり合いをまだ経験していない読者のために、がんこな子とはどのようなものを説明しましょう。

生まれたばかりの頃は、従順な兄や姉と一見変わりません。体重は三キロそこそこで、百%親に依存しています。放っておいたら、命は二日ともたないでしょう。神さまが思いつきでつけ足したかのように、何もできない手足がついています。なんという無力で無垢な姿でしょうか。

このような赤ちゃんに、二年足らずの間に何が起きるかは、まさしく驚きです。今や体重は十二キロになり、少しもじつとしていません。二年前には自分のミルク瓶びんさえ持てなかった子が、今では百キロもある父親をつかまえて、厚かましくもどこどこに行けなどと命令します。なんとずうずうしい！ 明らかに人をコントロールしたいという強い欲求があり、これは一生涯続きます。

うちの子どもたちが小さかった頃、近所にかんしゃく持ちの子がいました。三歳でしたが、母親はすでに困り果てており、親子の力関係では息子に軍配が上っていました。生意気な口の利きかたは、母親ばかりか周囲のだれの目にも余り、近所でも有名な子でした。

ある日、妻のシャーリーが見ていると、この子は三輪車に乗って家の前から車道に出て来ました。わが家は、カーブの所になりましたが、車がスピードを出して近づくのが見えたのです。母親があわてて家から駆け出して来て、懸命に三輪車をこぐ息子に追いつき、ハンドルを持って向きを変えると、三輪車の舵を奪われたその子は、こう叫んだのです。

「そのきつたない手をはなせよ！」

怒って母親をにらみつけていました。シャーリーがあっけにとられてみると、母親は言われた通り手を離しました。命の危険があるにもかかわらず、息子の言いなりになったのです。彼は三輪車をこぎ続け、母親はおろおろと後をつけるだけでした。

三歳の子が三十歳の母親をこんなふうに困らせるとは、どうしたことでしょう。彼女は子どもの扱い方が分かっています。息子のほうが強い、それは母親にも分かっています。このおとなしい母親から生まれた強情な息子は、手を出そうとする者みなに逆らいました。その振る舞いに母親は明らかにお手上げでした。以来、この家族と行き来はありませんが、彼の思春期はさぞかし大変だったことでしょう。

がんこは生まれつき

すなおな子どもと反抗的な子どもの性格のちがいを、どう分かりやすく説明しようかと



考えていたところ、まもなくぴったりの例がスーパーで見つかりました。通路でカートを押している自分を想像してみてください。カートをちよつと押すと三メートルほど滑るように進み、そつと止まります。スーパーや缶詰、ケチャップ、パンなどをカートに入れながら買い物を楽しめます。こんな楽な仕事はない。品物でいっぱいになつても、指一本でカートは思う方向に進みます。

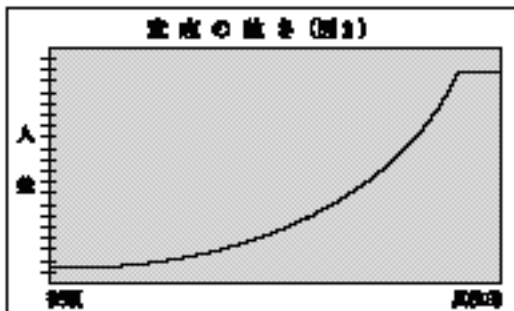
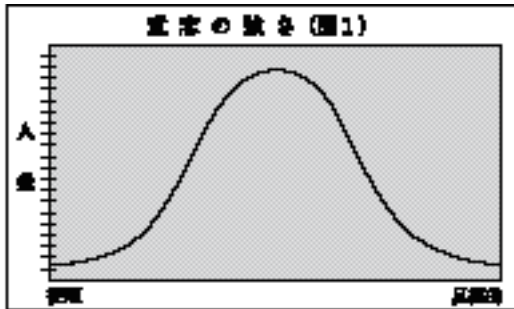
しかし、いつもそうとは限りません。お客さんの到着を不気味に待ち受けているカートが一つあります。スーパーの入り口で、あなたはたまたまそれを選ぶ。一押しすると、なんと左のほうにそれて転がり、積んであったペットボトルの山を倒してしまふ。空っぽのカートなんかは負けてなるものかと、ハンドルに全体重をかけて舵をとる。しかし、カートはまるで生き物のように、卵の棚のほうにあるいはミルクのほうに、そして緑のテニスシューズを履いている老婦人にぶつかりそうになりながら、右に左に揺れつつ走る。先週はあんなに楽に買い物できたのに、今日はうって変わつて大仕事。この反抗的なカートのおかげで、レジにたどり着く頃にはあなたはへとへと。

さて、この二つのカートのちがいはなんでしょう。明らかに前者の車輪にはよく油がさしてあり、押しした方向にまっすぐ進み、後者は車輪がゆがんでいて思い通りに進みません。これが子どもとどう関係があるでしょうか。はつきり言つて、ある子はゆがんだ車輪を

持つており、親の言う方向ではなく自分の思うほうにだけ行く傾向があります。そればかりか、母親は、「油がさされたゆがみのない車輪」の子の親と比べて、カートを押すだけではるかに多くの力を必要とします（意志の強い子を持つお母さんなら、このたとえを完全に理解できるでしょう）。

ところで、どれくらいの子が強い意志を持つているのでしょうか。以前の私は、従順な子と意志の強い子の分布は、典型的な釣り鐘型だと思つていました。つまり、図1に見る通り、一方に比較的わずかな数の従順な子がいて、同じくらいわずかな数の意志の強い子がいる。そして、その他大勢が真ん中を占めると思つていたのです。

ところが、少なくとも十万人の



悩める親たちと話した結果、この前提は誤りだったという結論に至りました。本当の分布図は、図2のようになるだろうと思います。

ただし、これをあまり文字通り受け取らないでください。子どもの大部分が根っからの反抗好きに見えているだけなのかもしれません。

それに関連したことで、説明はできないのですが、兄弟関係についてもう一つ、こういう現象があります。子どもが二人いると、だいたい一人は従順で、一人は意志が強い。どうしてそうなのかは分かりません。同じ親から生まれながら、別の惑星から来たかのように性格がちがう。片や喜んで抱っこされるのに、片やこちらのお腹を蹴飛ばす。一人は命令に従い、一人は命令を出す。明らかに、生まれつきちがうのです。

元大統領のフランクリン・ルーズベルトは、まちがいに意志の強い子どもで、意志の強い大人になりました。少年時代、彼は階段の上の見えないところにひもを張りました。予想通り夕食を運んで来た召使がまんまとつまずき、見るも無惨に階段を転げ落ちました。罰として何をされたかは、記録に残っていません。しかし、フランクリンは友だちの中でも親分肌で、何についても負けずぎらいだったとか。ある時、友だちに対する態度を叱られてこう答えたそうです。

「ママ、ぼくが命令しなくっちゃ、だれも何もしないんだよ」（注1）。

まさしく、意志の強い子です。

氣質がちがうために、家庭内で深刻な問題が起こることがよくあります。意志の強い兄は絶えず罰を受け、おどされ、説教されますが、あどけないブリッ子の弟は、ちやほやされて育ちます。性格がちがうためにライバルになって、一生いがみあって過ごすかもしれません（八章では、兄弟のライバル意識と争いについて具体的に話します）。

手ごわい子の生き方についてはふれましたが、次は、ひたすら両親を喜ばせようと努める、穏やかな子について考えます。実は、彼らは親にほめられ認められる必要があります。その性格は、愛され認められたいという欲求の表れです。機嫌を損じた親の一言にもびくつき、ちよつと眉をひそめられただけでも不安になる。この子は生まれつき、戦うのではなく愛し愛されるのが性に合うのです。

数年前に、こういう気のいい子の母親と話しました。幼稚園で問題がありました。気の強い子たちに毎日意地悪をされて、自分を守れない。毎日午後、お母さんが迎えに来るたびに、たたかれたりいやがらせをされていて、女の子たちまでそれに加わっていた。お母



さんは息子に何度も言い聞かせました。

「もつと自分を守らなきゃ。黙っていたら、いつまでも意地悪はやまないのよ」

もつと自分を主張するよう毎日励ますものの、それがどうもできない。しかし、ついにある日、我慢できなくて、母親の言う通り勇気をふるい起こすことに決めたのです。母親の車で幼稚園に行く途中、言ったそうです。

「ママ、こんどいじめられたらさあ、ボ、ボ、ボク、あいつらのこと、ぶんなぐってやるから。ほんのちよつとだけね」

「ほんのちよつとだけぶんなぐる」ってどうやるのか分かりませんが、この気のいい子にとつては、それが偽らざる気持ちだったのです。生き延びるために最小限の腕力以外は使いたくない。争いごとがいやなのです。これは親に教わったのではなく、生まれつきです。すなおな子は、必ずしも弱虫で意気地なしの子ではありません。これは、その性格を理解し、意志の強い兄弟とどちらがうかを理解するには、重要なことです。自信や危険をおかす勇気や人を引きつける力や、その他好ましい特徴の問題ではなく、むしろ意志力の問題なのです。喜んで目上の指導を受け入れる子たちと比べ、ある子たちが権威に逆らい自分のコースを自分で決めようとする傾向があるということです。こういう気質は生まれる前からのもので、親が教えたり励ます必要がないと、私は考えます。真の姿はまもなく外に現れます。

ところで、子どもの気質にもう一種類あります。ある親にはすぐに分かるでしょう。彼らは本当に意志が強いのではなく、少なくとも自己主張の仕方が異なるのです。そのちがいは独立心や攻撃性ではなくて、作戦のちがいです。親や教師の権威にがんこに抵抗することはあまりないのですが、それでも意地っ張りや意地っ張り。言わば「こつそり型」です。この子はすなおじゃないかと大人は思っていますが、実際には陰で反乱を企んでいます。人の見ていないところでルール違反をし、限度を越えます。いつかはつかまるのですが、するとウソをついたり、へ理屈を言ったり、証拠を隠そうとします。こつそり型への対処法は、意志の強い子を扱うのとそれほどちがいはありません。遅かれ早かれがんこさが表に出ます。普通は、それが思春期の始まりです。そこで「これはただ事でない」ということになるのです。

本章の終わりに、意志の強い子を育てている親御さんに二つのことを申し上げます。まず、罪意識を感じて自分を責める親が多いということです。懸命に努力はするのに、来る日も来る日も家庭の秩序を保とうとするだけで疲れ果てています。育児がこれほど大変とはだれも教えてくれなかったし、子どもとぶつかるのは自分がいけないからだと思ひ込むのです。愛情と威厳のある親になろうと自分では思っていました。パジャマを着た子どもたちにおとぎ話を読んであげたら、あとはいい子でベッドに行くものと想像していたもの

ですから、現実と理想のちがいに苦しみます。これについては、またあとでふれましょう。さらに、私のお見るところ、すなおな子の親は反抗的な子を持つ親の悩みが理解できないようです。それとなく「私のような子育てをしていれば、そんな問題はなくて済んだのに」とほのめかし、親の罪意識と不安感をますます強めます。双方の親に言いたいのですが、すばらしい育児技術や親としての覚悟があっても、反抗的な子を扱うのはなま易しいことではありません。家族の中でその子が比較的従順に協力するところまでもっていくには、何年もかかるかもしれません。意志の強い子は一生涯強いままで。権威を重んじることと隣人とうまくやっていくことを教えることはできるし、教えなければならぬのですが、気の強さはそのまま続きます。それは事実であり、別に悪いことではないのですから、小さいうちはパニックにならないことです。一夜にして子どもを変えようとしなくてください。まごころから子どもを大切に扱いつつも、こちらの言うことには従わせます。また、争う価値のある問題をよく見極め、その点では挑戦を受けて立ち、守るべき立場を決してゆずれないでください。子どものした良いこと、親に協力してくれたことには愛情で応え、関心を示し、「何々が良かったよ」と具体的にほめてあげます。

さて、本書のテーマが飲み込めたでしょうか。以下の章で、こういう子らの育て方、各年齢におけるしつけ方のちがいが、がんこさの裏にある理由、その他育児の様々な面についても学びましょう。

### 自分の意志がまるでない犬 — ミンディー

ところで、わが家の愛犬シギーの後日談を聞かれることがあるので、ここで少々書き足しておきましょう。このダックス君は、反抗心旺盛なところが玉に傷でしたが、結局十七年生きて、われわれを楽しませてくれました。

亡くなる少し前に、夜中の三時頃、どこかの若い連中が、深夜のドライブついでにかわいそうな小犬を一匹落っことして行きました。翌朝、わが家の玄関にこの子が現れたのです。おどおどして、腹をすかせ、行く当てもなさそうです。シギーは明らかに老いていましたが、二匹目を飼う余裕はなく、それにだれかが捨てていった雑種犬には興味がありませんでした。しかし、保健所に連れて行く気にもならず、もらい手を捜しているうちに、このかわいそうで気性の穏やかそうな犬がすっかり気に入ってしまい、娘がミンディーと命名しました。ミンディーは、わが家の飼い犬の中でも最も優秀な犬となりました。

主人の言うことをきく以外、自分の意志というものがまるでない。おそらく、小犬時代に言い知れぬ恐怖を味わったため、主人である私の機嫌をそこねることなど考えもしな

かったのでしょうか。叱られると、私のひざに飛び乗って腕の中に顔を埋めます。人間の仲間とだけ喜びました。私が机で読書したり勉強をしていると、いつのまにかそばに寄って来ては、ひざに頭を乗せていることがよくありました。そんな必要を抱えた生き物に、私はからきし弱いのです。外に出ているように言われると、ミンディーはちょこんと座ってリビングのガラス戸から中をのぞきます。懇願するような茶色の目で一挙手一投足を見守られるのに耐えられず、妻のシャーリーはブラインドを下ろしました。そして、彼女はいらだつように言ったものです。

「もうミンディーったら、しつかりしてよー!」

数年後、ミンディーのやさしさの分かる出来事がありました。二週間の家族旅行に出かけた時、彼女を裏庭に残して行ったのです。隣の男の子に、毎日餌と水をやってくれるように頼んだので、とりあえず必要は満たされたはずですが、十四日間ひとりぼっちにされる寂しさを軽く見ていました。いい図体をした犬が、寂しさのあまり物置に首を突っ込んで、



おもちゃ箱からダネーとライアンが子ども時代に遊んだ人形を掘り出したのです。打ち捨てられていたぬいぐるみを一つずつ、家の脇の自分のベッドのそばに運んでいました。

帰宅すると、ミンディーは八つのぬいぐるみとともに毛布の上に寝そべっていました。読者は、私のことを親ばかならぬ「飼い主ばか」だ、とおっしゃりたいでしょう。でも、神さまは犬という種を人間の友たちとして、特に忠誠心豊かにつくられたと私は思っています。驚くことに、伴侶を失った人で犬を飼っている人の一年目の死亡率が、犬を飼わない人の五分の一だそうです。ですから、愛情をかける対象がほしいと思ったら、近くの保健所で相性の良いワンちゃんを探すといいでしょう。ミンディーは、ドブソン家を世界一の御主人だと思っただけです。

けれども、ああ、このミンディーも、今はもういません。ある時、妻シャーリーが呼んでも姿を見せませんでした。そんなことは初めてで、出てみると家の脇で息を引き取っていました。リンパ腫が全身に及んでいたのです。そういうわけで、忠犬と愛情豊かな主人たちの物語は終わりました。さよなら、ミンディー。

シギーとミンディーという二匹の犬の話をしたのは、二つの対称的な性格を分かっていたためです。片や自分が王様になりたくて、片や家族の一員でいるだけで満足でした。彼らは犬の世界の両極端の代表です。

とにかく、私が言いたかったことはお分かりですね。本書は犬ではなく、人間の子どもたちの多様かつどこまでも複雑な性格に焦点を当てています。続く数章では、そういう氣質が親たちにとってどういう意味を持つのか、またそれを理解することが、正しい育児にどう役立つかを見えていきます。